

国連人間環境会議から50年

2022年6月14日

加藤 三郎

NPO法人環境文明21 顧問

グリーン連合 顧問

1. 50年前の世界

- 世界人口は今の半分(約38億人)
- 世界の政治は「東西冷戦(1947-1991)の真只中
 - 米はベトナム戦争
 - 中は文化大革命
 - 日・欧米は高度経済成長
 - 途上国は開発最重視
- 世界の経済規模(GDP)は現在の1/5程度

➤ 代表的な環境問題は

- 都市のスモッグ、河川の汚濁、工場公害
- 油による海洋汚染、酸性雨、熱帯林の減少
- 商品価値の高い野生生物の取引増

気候変動、生物種の絶滅、環境ホルモン、プラスチックの海洋汚染などは、行政課題としては存在せず。

2. スウェーデン政府のイニシアチブ

- スウェーデン政府は、1968年5月、国連の経済社会理事会で「人間環境会議」の開催を提案
- その理由は、「技術革新は否定的な面を含んでいる。特に無計画、無制限な開発は人間の環境を破壊し生活の根本をおびやかしつつある。この問題をあらゆる角度からとらえ、国連における討議を通じてこの深刻な問題に対する理解を深め、国連諸機関の調整を図り、国際協調を強化する」というもの。
- この年の国連総会で、72年6月にストックホルムでの開催が決定。(69年から準備開始)

3. スtockホルム会議の素晴らしい成果

(1)「人間環境宣言」の採択

今日の「地球環境」問題への対処につながる認識と諸原則の明確な表明(いわば「聖典」)。

<1774年米 独立宣言、1789年仏 人権宣言にも匹敵>

(2) 国連の“環境庁”UNEPの創設

オゾン層の保護、気候変動や生物多様性などの条約、議定書づくりの科学的基盤を提供。

(3) 人類の英知の誘発

- ローマクラブの「成長の限界」
- OECDの「汚染者負担の原則(PPP)」
- シューマッハーの「スモール・イズ・ビューティフル」
- 中野孝次の「清貧の思想」(但し1992年出版)

4. その後の50年、地球環境の深刻化は止められず。なぜ？

- 海洋油濁防止、オゾン層の破壊防止、酸性雨など、いくつかの問題では成果発揮。
- しかし人口増加、都市化、工業化、科学技術の飛躍的進展などの社会経済上の急速な大変化を前にしては、真に効果的な対策を取れずに立ち停まっている間に、地球環境は悪化の一途。

<考えられる理由>

① 少なからぬ人の「無知・無関心」

ストックホルム宣言(1972)でも警告

「無知、無関心であるならば、われわれは、我々の生命と福祉が依存する地球上の環境に対し、重大かつ取り返しのつかない害を与えることになる。」(前文6.)

② 経済的豊かさへの固執

科学による地道な成果を軽視し、環境の有限性を無視した「経済成長」至上主義の是認。

③ 「環境」に配慮する余裕のない人の激増とそれにつけこむ政治の横行

* 反科学、陰謀論など積極的、攻撃的な懐疑論を含む

5. グリーン連合の課題

- 従来型の環境科学(例: IPCC、IPBES)に基づく最新知見と政策提言を多くの良識ある市民、経済人、政治家などに訴える努力を一層拡大
- そのためには、①、②、③に配慮した活動を、他の市民グループと組むなど、活動の幅を広げる必要
- それを可能にするためにも、市民組織(環境NPO)のエンパワーメント(特に公的資金を含む資金基盤)を市民社会や中央・地方の政治家への働きかけを強化